

介護用トイレ中核ユニット



酒井医療が発売する在宅介護用のポータブルトイレ「ルーマ」。諏訪地域の企業グループが特殊樹脂の袋に便を封入する中核ユニットを開発した

樹脂成形のみやま(茅野市)を中心とする諏訪地域の中小企業13社が、福祉設備販売大手の酒井医療(東京)が来春全国発売を予定する「在宅介護用ポータブルトイレ」の中核ユニットを共同で開発した。金属、ゴム、電子基板など、各社がそれぞれの技術を生かして部品やシステムを手掛け、ユニットを組み立てて供給する。地域ぐるみで受注を開拓するモデルケースとして注目を集めそうだ。

諏訪地域13社 技術結集

樹脂成形の「みやま」など供給 受注開拓のモデルに

新開発のトイレ「ルーマ」

は、要介護者のベッドの脇などに置くことを想定。普段はソファとして使え、座席のマットを外すと便座が現れる。使用前に便座の下にあるボタンを押し、便器内に特殊な樹脂の袋をセット。使用後にもう一度ボタンを押すと、袋の上部が熱で圧着され、便などが密封される。

袋に凝固剤を入れて便を固めると、自治体によっては可燃ごみとして捨てることができるという。タンクに排せつ物をためる形が多い現在主流のポータブルトイレに比べ、臭い漏れなどがなく処理の手間がかからないのが最大の特長だ。価格や販売目標は未定。

介護浴槽などを製造・販売する酒井医療は、拡大する在宅介護分野への進出を目指して新たなトイレの商品化を模索。商談でつながりのあったみやまに昨秋、袋をセットし、密封できる機能を持つユニット

の開発を持ち掛けた。

みやまには樹脂加工以外のノウハウがなかったため、諏訪地方の製造業の情報を持つNPO法人諏訪圏ものづくり推進機構(諏訪市)が窓口となつて企業を募り、システム開発のイー・シーシステム

(諏訪市)や金属精密加工のヤマト(同)などの協力を得て部品や制御システムを開発。約1年で量産できる態勢も整えた。切り離して使う幅50センチ、長さ20センチの袋を折り畳み、ユニットに納められるようにする装置も独自に開発。ユニットと折り畳んだ袋を酒井医療に供給している。

みやまの百瀬真希社長は「諏訪地域は技術力がある企業が多く、手を結ぶことで新たな受注を開拓する機会が広がる」と説明。「今回の受注を皮切りに、地域で担う仕事を増やしたい」と話している。

ルーマは16、18日に諏訪市で開く諏訪圏工業メッセで展示する。